渡辺生子（日野図書館分館長）：開業120周年記念ということでイベントを開催させていただきました。皆様のお力により本当にたくさんの人がいらっしゃって、無事盛大に迎えることができました。今日はその続きで、この昔の「よもやまばなし」、日野駅がどうだったかという話を皆さんに自由に語っていただき、図書館としましては、これはやはり後世に残しておきたいと思いまして、この記録を録音して後々のために、テープ起こしなどをして冊子に作るなりして、後世に残していきたいなと思っておりますので、今日は本当に自由にご発言などをお願いします。

まず初めに、発見隊代表の滝本よりご挨拶をお願いいたします。

滝本光男（仲町）：どうも皆さん、お忙しいなかお越しいただいて本当にどうもありがとうございました。「よもやまばなし」ということで、自分が日野の駅を利用したときに、こんなだった、ああだったと、いろいろお話が出てくるかと思います。とにかく私も日野にご厄介になってちょうど50年になりました。50年前は本当にまだ横断歩道はないし、ガードレールもないし、本当に淋しい、人口があの頃何人だろう、1万7,000人ぐらい。2万人いってないんですね。それで、ここで商売になるかどうかというふうに。当時図書館のところが、郵便局に有山さんが売ったのが、1万2～3,000円、坪。それで有山さんが裏へ引っ込んだんですね。それでその当時多摩平の方が開発されたのがその前で、坪2,000円とか3,000円とか、めちゃくちゃに日野は置いてきぼりを食っちゃった感じで。その点ね、村から町になったのが立川より早いし、これから日野を何とか、大勢の方が日野に来てくれるようなまちづくりに、何とか私はしたいと思って一生懸命やっております。

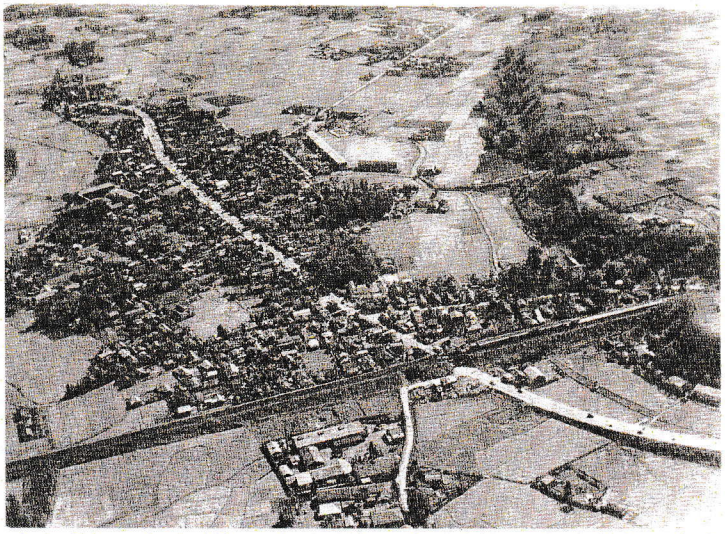
今日は「よもやまばなし」ということで皆さんの知っていること、わいわいとやっていきたいと、こんなふうに思っております。よろしくどうぞお願いいたします。

渡辺：ありがとうございました。それでは次に、日野の駅長さんがお越しいただいておりますので、駅長さんの方からお願いします。

山下駅長：日野の駅長の山下です。今日は「よもやまばなし」ということで、大変楽しみにしてまいりました。と申しますのも、今駅を預かっているのですけれども、この120周年を迎えるに当たって、いかに駅のことを知らないかというのを思い知らされていて、特に昔のことをよくご存じの方、あえて言わせてもらえば「語り部」というんですかね、そういう方々のお話は大変貴重だと思います。そんな話を今日お伺いできるとお伺いしましたので、楽しみにお伺いいたしました。今日は2時間ぐらいですか、ごめんなさい、聞く側になることが多いかと思いますけれども、大変楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。

石嶋日出男：すみません、お待たせして。事務局をしております日野図書館の石嶋といいます。2時間ほどですけれども、よろしくお願いいたします。

早速ですけれども、明治23(1890)年に、開業した日野停車場。そしてそれから約50年ぐらいあとの昭和12(1937)年、今のところに移った新駅舎と、新旧あわせて120年の歴史を持つ日野駅なのですが、先ほども渡辺の方から話がありましたが、現在、日野駅脇に展示しております写真。今日も提供していただいた方



が何人かいらっしゃいますけれども、その写真にまつわる思い出をまず皆さんからお聞きしたいということで、よろしくお願いいたします。これを記録に残したいということもありますので、お名前と、出身の旧町内名ですかね、教えていただければと思います。またよろしければ何年ぐらいのお生まれなのかもちょっと付けていただけるとありがたいです。

特に今日は四ツ谷の小島さんのところのご出身である吉田テイさんにおいでいただいております。



吉田テイさん、谷スエさん姉妹

吉田テイ：どうも、何かもう昨晩の夕食のおかずも忘れるような歳になっちゃいましたもので、昔のことなんか正しくお答えできるかどうかわかりませんけれども、私でわかるようなことはお伝えいたしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

石嶋：よろしくお願いいたします。吉田さんはもう 90 を。

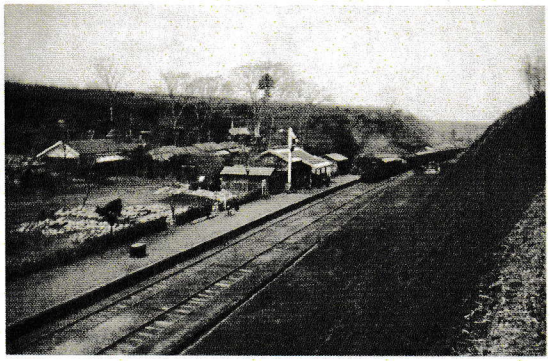
吉田：長生きしちゃって恥ずかしいんですよ。何も役に立たないのに長生きしちゃって。本当に申しわけございません。

石嶋：よろしくお願いいたします。今日は 90 代の方を筆頭に 80 代、70 代、まだまだお若い方、学生さんは 20 代もいらっしゃるんですけれども、特に 50 代以上ぐらい、半世紀以上前ぐらいの、旧というのはおかしいですけれども、日野駅、停車場なんかの話が特に今日出るとうれしいなと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

さて、今皆さんが見ていただいているのは、これ昭和 30(1955)年、昭和 28(1953)年ぐらいですかね。日野駅を、ここが日野駅になっていますけれども、日野町の様子です。一応ちょっとおさらいしておきますが、ここが八坂神社、大昌寺ですね。ここが中学校で、小学校。で、ここが日野駅です。今ここのところに細く見えますのが、これが旧甲州街道で、実は皆さんがここに、今大屋さんがいますけれども、ここのところですかね、このあたり。ここが志村さん、屋号で言いますと大屋。四ツ谷の方はもうちょっとこちらなんで

すが、ここに薬王寺があります。で、甲州、日野坂ということです。

で、これから見ていただく写真は、この昭和 12(1937)年に移る前のいわゆる日野駅停車場、ちょっと駅名看板が写ってませんで残念なのですけれども、こちらの方からまず写真を映しますので、それを元にご自由にお話いただければと思います。



日野停車場
明治 30(1897)年代
佐藤彦五郎新選組資料館所蔵

石嶋：これが佐藤彦五郎新選組資料館からご提供いただいた日野停車場。明治 30(1897)年代ということで教えていただいているのですけれども。これは特に今ご紹介いたしました吉田さん、いかがでしょうかね。ちょうど南側からこう停車場を撮っています。

吉田：お寺さんのおうちね、あそこ、宝泉寺を上がって、あそこが結構な坂だったんですよね。それでもうずっと砂利道でしたね。駅まで続いて、その当時、もう私はもう高等小学校を卒業してから東京の方へ奉公に出ちゃったものですから、盆とかお正月にうちへ帰るぐらいしか日野の駅というのもね、乗り降りしないんですよね。その当時でももう間、１人２人ぐらいしか乗り降りしないような駅だったんですよね。

石嶋：ちょっと拡大してみます。人影が。これがちょうど駅舎ですよね。で、ここへ。ここにも人が写ってますが、ここに写っているのはこれ、何なのかなと思ったんですね。ちょっとわからないです。それで実はこれと、もう１つこういうのがありまして、これがやっぱり昭和の初期ということなんですね。日野駅停車場で、恐らく向こう側が立川の方向。

吉田：飯綱神社じゃないの。ちがう？

山崎：飯綱神社のお祭りなんですよね。

石嶋：そうだね。これがやっぱりあれですか。

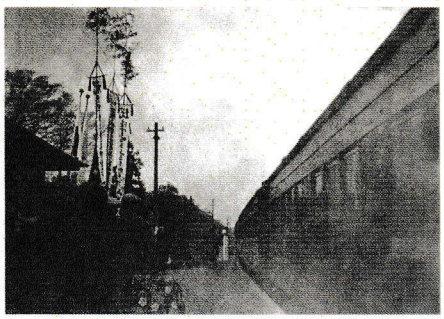
荻原親雄（横町）：飯綱神社のあれだね。旗だねお祭りの。

谷スエ（仲町→四ッ谷）：お地蔵さんみたいな感じ。

不明：「祝」って書いてあるね。

石嶋：これやっぱりあれですかね、兵隊さんに送り出すときの何でしょうかね。ちょうど出征される兵士の方の。

不明：出征兵士があったのかね。



日野停車場ホーム
昭和初期頃（推定）
佐藤彦五郎新選組資料館所蔵

三浦清司（仲町）：出征兵士がこんなの出さないもの。ほとんどみんなおばさんだから持つ奴いないよ。

石嶋：そうするとそれはおかしいと。

木村邦生（下町）：12 年にこっちへ降りてきているんだから、そのぐらいで出征兵士はないよ。

石嶋：15 年戦争だから昭和。

不明：「祝」でもお祭りだから。

荻原：旗があるね。

不明：提灯行列。

谷享司（仲町）：日の丸立ってるよ。

石嶋：日の丸立ってる、ここへね。

谷享司：ということは祝日。

不明：祝日のお祝いだけで旗なんか。

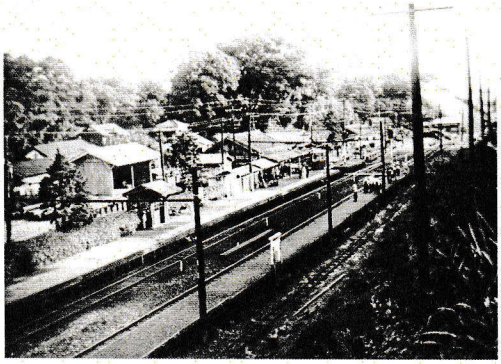
不明：お祭り？

谷スエ：ちょっとあれお地蔵様みたいですよね。



日野停車場 －駅舎と駅員－
昭和 5（1930）年頃
馬場収氏所蔵

石嶋：ちょっとこのままじゃわからないみたいです。そうするともう 1 枚なんですけど、あとはこの日野停車場の、これは先ほどホームのところで、こちらが多分ホームで、ホーム寄りの、ここが駅長室だと思うんですが、この方が駅長さん。これを提供していただいたのが馬場収さんですが、馬場収さんのお父さんが写っています。この駅の近くにお住まいの方が何人かいらっしゃったみたいです。どなたかご存じの方なんか、どうですかね。吉田さんが写ってますですかね。ちょっとわからないですかね。ではもう 1 枚。



日野停車場
昭和 10(1935)年前後
日野市郷土資料館提供

これはもう大分、昭和 10(1935)年前後ということで郷土資料館からお借りした駅。昭和 5 (1930)年にもう電化されてはいるんですが、まだ今の新駅舎の方に移る前のようなんで

すが、この辺は先ほど見ていたのと同じかなと。ここにちょっとこう写ってますけども、女学生のような。ホーム自体は、このときはまだ単線だと思うので、交換点がこちらと、こちらと。で、ここを抜いていくんですね。

吉田さんなんかあれですかね、八王子の方に行かれるとか、あるいは逆に立川に行かれるとか。

谷享司：立川はね、鉄橋を歩いて渡ったんですよ。(笑い)

石嶋：何か、いかがですかね、この写真から。こういう位置から、この写真の立ち位置から見るということは余りなかったですかね。

谷スエ：向こう側が立川方面なんですか。

石嶋：こっちはそうですね。

吉田：向こうが立川ね。こっち側が続くものね。結局向こう側ですよね、乗り降りが、柱があってこちらだけだったんですよね。それで宝泉寺の坂を上がるとあそこに踏切があって、そこを左へ行くと、砂利道で駅へ行ったんですよね。そこに今考えるとあれが日野の駅長さんのおうちか何かだったのかしらね、そういううちが。社宅があったんですよね。

石嶋：この反対側というか、ちょっとこういう写真も見ていただければ。これが新駅というか、12年、11年か12年頃らしいのですが、停車場の西側というんですかね。この方が天野さんっておっしゃるのですけれども、台湾にいる（立川愛雄さんと）、これから結婚されるということで。



台湾に嫁ぐ花嫁の見送り
－日野停車場前にて－
昭和12(1937)年頃
天野嘉明氏所蔵

谷スエ：キヨさんでしょ。

石嶋：この方は天野清子さんなんですけど、この方は結婚されるということで台湾に行くにあたって、一族というか立川さん。こちらがその旦那さんになる側の立川家。で、こっち側にいるのが天野さんのご家族。で、見送りに皆さんいらっしゃっているというところらしいんですね。これで、、谷さんなんかも、おわかりの方とか、ほかに何か。

谷スエ：前にいる、こちらから3番目の方、女性の方は小峯さんの娘さんですよね。実家の前にいるスズちゃんですね。

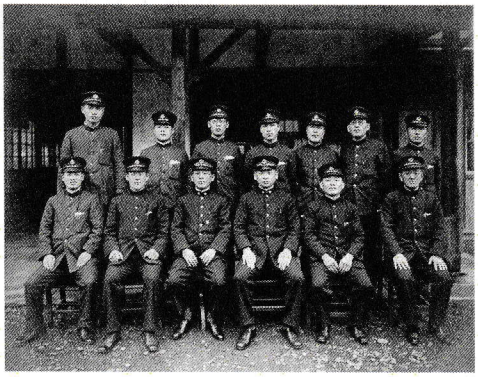
石嶋：やっぱり四ツ谷の方ですよね。

谷スエ：そうです。ええ。一番端の人が天野、今何とおっしゃるのかな。おばあちゃんですよね。

石嶋：この方のお母さんが。

谷スエ：お母さんがそうですね、台湾に行った。

石嶋：この方が立川さんで、この方が旦那さん。で、子どもさんがこの方。ちょっと人物はあれなんですけど、これはその日野駅舎の前でということなんです。



日野停車場 －駅舎と駅員－
昭和 11（1936）年頃
馬場收氏所蔵

石嶋：これは新駅ができるということで記念に日野停車場で撮られた写真ということなのですが。さっきの台湾に送り出す方はもうちょっと右手で、この左手がいわゆる改札口なんかがある方なんですよね。

不明：これだけ駅員が。

渡辺：たくさんいるんだよね、このときから。

天野春光（横町→八王子）：小さい割には人が多いよな。

山下駅長：昔は人出でやると、鉄道システムもありませんでしたので、それと今も話がありましたけど、貨物列車とか荷物列車なんかもやっていましたから、それの、旅客だけじゃなくて、そういった取り扱いもありましたので、人が多かったのだと思います。

天野：信号所があったじゃない。

山下駅長：はい、信号も。

石嶋：こちらの方が駅長さんですかね。

山下駅長:そうです。この間その話になったんですけど、帽子の２本線が大体クラスの、この方はちょっとボタンの上から３つ目の右下に、また徽章がありますよね。でもこれが今でもあります。

石嶋：こちらの方は助役さん。

山下駅長：ええ、多分そういう形になると思います。

石嶋：次にじゃあ、行きますね。今日荻原親雄さんにお出でいただいているのですけれど、提供していただいた方です。荻原さんから提供していただいたなかに、先ほどの日野停車場の面影を見る写真が。これだと難なくなく皆さんに。

荻原：左側の高い建物が、これが信号所で、何というんですか、あれ（レバー）。あれ等が入っているところですね。それで一番その、右側の先、そこが多分一番、何ですか、駅長さんかな。何か一番トップの人がいる宿舎だと思うんですよね。

山下駅長：官舎。

荻原：官舎。それでその手前の２軒、もう１軒、３軒あるんですけど、そこも官舎だったんですね。それで旧駅というのはその先ですね。その辺にあったんですね、昔の駅舎、駅が。それで今この当時はもうなくなって、丸通というか日本通運の貨物船の引き込みというか、あれになっていたんですね。

石嶋：ここへあれなんですか、これが。

荻原：それが引込み線になっていたんですね。砂利とかコークスとか、石炭とか。

石嶋：今の実践の女子大にいく道ってこう、できてますよね。

荻原：ええ、それはそこの。

石嶋：この辺にこう。

荻原：そうそう、それがずっとまっすぐ行ってるんですね。

石嶋：じゃ、ここへは。

荻原：切通しですね。それで自分の家はそこの２階家、そこですね。だから20、僕が越したのはまあ、家買って引っ越して来たんですけど、昭和28(1953)年なんですね、越したのが。それで、何かその辺に昔は引っ越したときに駅があったと。前に。それで何かそこの忠霊塔ですか、あそこに天皇陛下、昭和天皇か何かが来たときに、お茶屋か何かをやっていたらしいですね、昔、家が。それでそこに泊まったという話を聞いたことがあるんですけど。藤棚があった。



日野停車場跡
昭和30(1955)年代前半
荻原親雄氏所蔵

谷スエ：小松屋さんだったっけね。小松屋さんっていうの。私たちのおじいさんの兄弟なんですけどね。小島から小松屋さんへ昔、養子というんでしょうか、入りましてね。やっぱり私もね、小学校まだ上がる前に母と、福生におじがおりまして、そこへ行くのに旧駅、そうすると６歳、５～６歳のときにそこで乗った記憶があるんですね。それでそこが小松屋のおじさんの家なんだよって言って。で、藤棚がありましてね。それでそこで何か、お団子か何かを食べさせていただいた記憶がちょっとあるんですけども。

荻原：ただ家の前が多分、もう１枚あると思うんですけど、そこに多分、まあ藤棚は写ってないけど、多分そういう面影があると思うんですけれども。

石嶋：じゃ、ちょっとここであの。

不明：すみません、今の。すみません、もうちょっと。ご自宅は今のどこら辺。

荻原：高速道路の南側ですね。今の中央高速の。

不明：あの南。

荻原：ええ、今あの、何ですか、ここの。ああそうですね、今指してもらった所に変電所ができてますね。その辺が今変電所になるんですね。

石嶋：高速道路をちょっと過ぎた右手が、あれですよね、荻原さんのところですよね。

高橋克寿（新町）：今空き地になっているところ。

谷享司：全然関係ない話、今右手の引込み線の上の方、そこの右手の山。ここが坂西古墳、今の。それで引込み線をつくったときに、そこを切通しに少し削っているんです。そのときに遺構が１個出ているんですよ。それが何年前だっけ、昭和51(1976)年ぐらいまであって、そのあとにもう一度そこを拡張する工事をやったときに、坂西古墳というのが出てきた。それがまた高松塚がでたあとだったので、すごく騒がれたんだけども、ものすごく地味だったんで話題にならなかったです。(笑い)

荻原：昔は我々、小さいときに防空壕だと思って遊んでましたよ、中で。(笑い)

谷享司：あそこは古墳群で、全部で５基あるんですけれども、最初１基が半分削られて露出してたのですけども、それから南側にずっと、あと５つ続いてて、話題になった坂西古墳っていうのは中の壁を全部、胡粉ですよね、貝の粉で白く塗ってあったんですね。

渡辺：今の話の中で、石炭とかコークスがかなり輸送の貨物のなかで大きな位置を占めたのかななんて、私なんかは若いから想像がつかないんですけど、そのための貨物というのがかなりあったんでしょうかね。天野さんのさっきちょっと、天野さんもちょっと話してね、何か石炭が。

天野：そこは引込み線で、いろんな貨物で、石炭だとかコークスだとか、そういうものが入って来たんですよ。それとあと日通さん。丸通ですね、昔の。それが、車が来て、そうして各、ここは工場が多いので、日野ジーゼル、今の日野ジーゼルですね、そこへ燃料を持って行ったんです。それとその頃、私は荻原さんの隣の上の方にいたんですけれども、２階家の向こう側にいたんですけども、そのときに丸通の課長さんは高木さんだと思います。声をかけてくれておこぼれをもらって来たということです。（笑い）そういう思い出があります。

それでここは車が通るので、その丸通までで、その引込み線までしか道はなかったんですよ。もうそこで、そしてその奥にはちょっと山がありましたんで、清水が湧いていて泳げたんですよ。それでいろんな、子どものときですけどね、そういうあれがありまして、それでそこでよく泳いだり、それから魚を取ってみたりしたんですけどもね。それでそこの山を、こういう木が随分多くありますね。そして線路が向こうの八王子の方に出ていますね。あの泥というのは、今の中央線の多摩川の、あの「ノリ」をつくるために泥を運んだと聞きました。それで今の多摩川の土手ができているということらしいです。それは親父から聞いたんですけどね。そんなことです。

それであそこに信号機の、信号所のところに広場がありますね。それは日野のお祭りで９月２日にお神輿が来てね、さんざそこで食べ食いしたりしたんですよ。そういう思い出があります。

木村：ああ、そこまで持ってきたんだ。

天野：はい。

荻原：そこですね。

山崎：今公園のところですよね。

石嶋：官舎ですよね、の前に。

荻原：そこの広場ですね。

石嶋：これが昭和 34(1959)年頃ですか。

荻原：そうですね。

石嶋：ラジオ体操をしているということで、荻原さんは。

荻原：右から３番目ですか、後ろ、それですね、多分。

石嶋：こちらが荻原さん。（笑い）それで、もう１枚こういうのをいただいているんですけれども、これと、これ。先ほど信号所を教えていただいたんですよね。

荻原：これ、多分それがＪＲの、そこまで用地だったんですね。それでうちの方は前の



ラジオ体操をする子どもたち
－日野停車場跡－
昭和 34(1959)年夏
荻原親雄氏所蔵



信号所　－日野停車場跡－
昭和 32(1957)年初頭
荻原親雄氏所蔵

方を借りていたんですよね。30 坪ぐらい多分あったと思うんですけど、今矢印があったところら辺に藤棚があった。

石嶋：こちらが、親雄さんですね。今おっしゃったところ。で、矢の山のこれが、上の方がこっちなんですか。

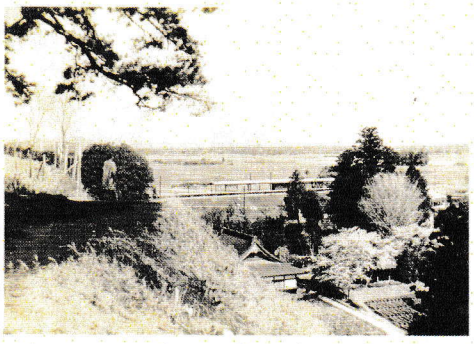
荻原：そうですね、今アパート、大きい何ですか、マンションになっているところですね。

天野：でもこの頃が一番よかったね。暖かくてさ、よくお世話になりました。子ど　もの頃。

石嶋：そうして、今大体日野停車場と出てきたんですが、河野さんから、今いらっしゃっていますけれども、河野さんからお借りした中にこんなのがあります。ちょっと河野さんにこの辺をお話になって。

河野喜映：横町に住んでいた河野です。これは写真の裏に書いてあったのが昭和 12(1937)年の４月か５月でしたかね。それで今の矢の山公園ですけど、当時御野立場と言われていて、一種の公園になったので、そこから撮った、宝泉寺の裏山から撮った写真です。多分そこに写っている人物は宝泉寺の先代の住職さんということだと思います。日野駅がまだ開く前、直前のところです。それで、土手のところに斜めに線が走っています。日野駅の駅の下に。これは日野駅のいわゆる駅舎から、下の、今の駅舎からホームの一番反対側、左側の奥に駅長室とトイレがあって、そこまでの交通路です。コンクリで作られていまして、私はちょうどその下に住んでいましたから、そこがよく遊び場になっていたんですけど。これが、一応そういうのがありましたが、またあとの写真でちょっと出てくるので。

杉の木がずっと写っているところの、ちょっといいですか、それをずっと左へ持っていってください。駅舎の下。もう少し上。杉が終ったところですね。その上、そこですね。そこが待合室ですね。木造の待合室があったところになります。それで左に松が写っていますけども、実はこれ大きな松の木がありま



現矢の山公園付近から日野駅ホームを望む
昭和 12(1937)年４月
河野和正氏所蔵

して、「笠松」という松がありました。先ほどちょっと出ましたけど、陸軍大演習が大正10(1921)年の11月にあって、そのときに昭和天皇が皇太子の時代にここへ来られて、何か監察する陣地というか、場所が置かれたんですね。そのときにこの松の下に置かれたという状況です。で、それを記念して御野立場という公園になって、戦後忠霊塔、あるいは慰霊塔がつくられて、今矢の山公園になったということです。下に見えるのが宝泉寺の本堂と、今桜が咲いています、そこのところ。ですから、桜の咲く時期に撮ったといふうで、その下の畑は麦になっている。まだ麦畑ですね。そういう状況です。



新日野駅開設前年の横町付近
昭和11（1936)年２月
河野和正氏所蔵

石嶋：もう１枚。

河野：これですね、左側の端の方に線路が写っているんですね。それで実はまだこれ、駅ができる前の写真で、11年の２月の雪のあとに、12年の前の年ですね。11年の２月に、雪のあとに撮った写真で、まず電化されているんで碍子がたくさん乗っている電柱がそこに、電線が通っていますね。これは私、子どものときもこの記憶がありますし、戦後までありました。それで民家が手前の方にありますけど、民家の右手の雪が、それがもとの甲州街道ですから、さっき四ツ谷の方から来られたって、日野駅に行かれるにはそこを通られたということになります。その右側が宝泉寺ということで、最初の電柱の下側の、我々の家はこれ、三田コウちゃんところの家ですね。その向こうが、それが三田、「棒屋」ですね。その向こうが「橋場」で、うちの家になります。一応大きなところはそういうところですね。あと右手奥の方に、もう少し右ですね。その奥の木立が、それが八坂神社ということになります。大体そんなところですね。

石嶋：はい、ありがとうございました。そうすると、大体今、日野停車場についてちょっとお話いただいたのですけど、何か付け足したいとか、ご質問とかあれば、おっしゃっていただければ。

河野：ちょっと荻原さんのあれ、いいですかね。あの遠景。それで、ちょっと言っていいですか。ここからここまでは切通しです。これが自然のくぼ地が残ったんですね。さっき言いました、話にありましたように、ここは自然面です。それでここは話に出ました切通しになっていまして、今試験場があるところだね。それから多分荻原さん、これヒューム管ですよね。ちょっと出なかったヒューム



管も一応搬送されて。ここの部分が多分車が入れるようになったんじゃないですか。ここまで。

荻原：そこは入れていたね。

河野：だと思います。それであとここに３本線がありましたので、その間に、ここに電車が止まっているということで、これ３両編成か何かみたいですけど、４つドアで窓が３段になっているような感じ。茶色い古い電車が写っています。

それと明治の、最初の写真いいですか。あ、昭和の写真。ちょっと荻原さんにさっき聞いたんですけど、これが荻原さんのところですよね。

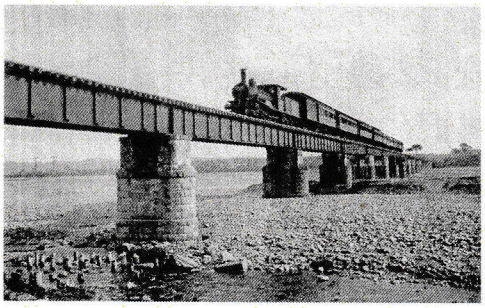
荻原：そうですね。

河野：この建物は。これが。

荻原：それが高木さんだと思うんですね。さっきあった手前の２階家。

河野：この２つは荻原さんの写真にも載っていますね。あとですね、ちょっとこれは私の想像ですけど、この建物ですけども、これちょっと荻原さんまでお願いできますか。もしかしたらですけど、この建物は何らしか可能性あるようなところですね。この建物で、これ信号所のちょっと棟が見えてます。信号所は少し見えますけども、この建物が大きさと場所的には一番あれに近いんじゃないかとは思うんです。昭和 12(1937)年の、引っ越す前の写真に近いんじゃないかと。ですから、そうすると駅舎はこの辺りにあったんじゃないかと。もとの、停車場ですね。停車場は。だから停車場の前が広場になっていない。荻原さんところのまん前にあったんだろうと、じゃないかと考えられるんじゃないかと思っています。

石嶋：今ちょっと駅舎の方を見ていただいたので、ちょっとここで全然違う。これは今日いらっしゃっていませんけど、佐藤元雄さん、「藤屋」という屋号の。元雄さんのところで発行された日野名所絵葉書の中の１つで多摩川鉄橋ですね。これ、単線なので、今で言うと上り線ですかね。手前が日野、向こう側が立川でよろしいですかね。この部分、大分今あれですけれども、多少残っているところもあります。古いあれで。この汽車なんかはね、鉄道関係の方にお聞きした方が早いのかもしれないですけども、今回 120 周年記念で、あれはクッキーですね。クッキーを作りましたけども、なかなか昔の、これは何年ぐらいでしたっけ、大正８(1919)年に発行していますからその頃なんですけれども、明治の、この当時の汽車というのは確認できたんでしたっけ。

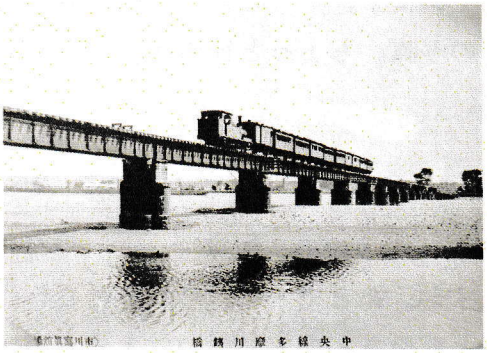


多摩川鉄橋
－藤屋発行日野名勝絵葉書－
大正 8(1919)年発行
佐藤元雄氏所蔵

谷享司：一応イギリス製の 2000 系とか言われる蒸気機関車じゃないかなと思います。

石嶋：クッキーじゃない、ごめんなさい、クッキーじゃなくてシールね。シールを今日来ていた谷享司さんにアレンジしてもらったんですね。

それで作っていただいたんですけれども、こういう機関車、大正の時代ですね。もう１つ郷土資料館の方からお借りしたやつが、こういうのね。これは全然違うんですけれども、市川写真館ってあるんが、これは八王子にあった市川写真館で、ちょっと日野の高幡にある市川写真館とは関係ないそうです。これも、北村さん、こちら、手前が日野でよろしいんですかね。



多摩川鉄橋
大正５(1916)年～10(1921)年頃
市川写真館撮影
日野市郷土資料館提供

北村：多分そうですね。

荻原：これ、機関車が逆さになっているけど、何かあるんですかね、引き方が。

石嶋：こういうのっていうのもあるんです。

山下駅長：そうですね。

石嶋：これは手前に進んでいるの？　押しているの？

谷享司：日野の方に。

石嶋：この方が馬力はあるんですか。

山下駅長：それは前進の方が、当時の機関車、汽車ですか、蒸気機関車も前進の方が。自動車と同じように考えていただいていいんですけれども、前進の方が馬力はあります。

石嶋：ちょっと２点汽車を見ていただきました。

谷享司：ちょっとこれ、蒸気機関車は違うよ。同じ機関車じゃないよ、これ。

石嶋：小島さんなんかは、昭和５(1930)年にもう電化しているんですけれども、お乗りになったのは汽車なんかはお乗りになっているんですか。

小島：貨物列車というんですか、石炭とかね、何か積んだ。子どもの頃よくあれが何十台続いているかなんて数えたのね。65、66なんてしたのを覚えてますけどね。

石嶋：もうあれですね、電車を乗られてたんですかね、昭和５年にもう電化しているから。

小島：電車であれですよ。会社なんかに行ったんです。

石嶋：貨物なんかは。

谷享司：蒸気機関が使われていたのは、貨物がほぼメインだったみたいです。とは書いてあったけどね。これね、よく見ると蒸気機関車の両サイドに付いているステップがあるの。そのちょっと上、そこ。そこが、この蒸気機関車は前が上がっているの。これが何かね、イギリス製にあるので、さっきのはまっすぐだったんでものが違う、違う電車。これ、まっすぐでしょう。だからさっきのとは違うんだよ。

石嶋：はい、汽車をちょっと２点、見ていただきました。そうするとちょっと今度は、今度のはね、もう新駅ができたということでお祝いの、八坂神社で、これ豊田行きと両方なんですね。ここへちょっと書いてありますけど。日野、旧字ですね。日野豊田両駅開通、開通って書いてありますね。「祝開通」。ここでこういうお祝いをしたということ、あれなんですかね、小島さんなんかは覚えていらっしゃいますか？昭和 12(1937)年。



日野豊田両駅開通祝賀会 －八坂神社－
昭和 12(1937)年６月
日野市郷土資料館提供

小島：残念ながら。

谷享司：昭和 12(1937)年じゃもうあれだよ。

小島：新駅ができたときにはいませんでしたからね。

山下駅長：今のケースで、私、今のその日野～豊田、豊田～日野ですか、これは「開通」というのは何を、開通をお祝いしたのかというのはちょっと一瞬わからない、でも日野は明治 23(1890)年、豊田が明治 34(1901)年開業だと、その当時の写真ではないみたいですので、何の記念だったのかなとちょっと、もしおわかりになれば。

石嶋：開業が、12 年にお祝いを八坂神社でやったというのは記録にあるみたいですね。その前のは。

不明：「開通」と書いてあるんですよ。

山崎：「開通」って書いてあるのに、日野駅が新しくなった。

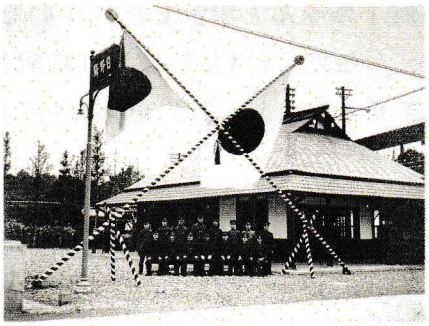
不明：複線化。

山下駅長：複線化がその昭和 12(1937)年ですか。

不明：そうですね。

山崎：タイトルの付け方が適当過ぎるんじゃないの。

石嶋：明治 23(1890)年にあれは宝泉寺で何かやったというような。で、今回の展示でもよく使われたのが、今回もこれと同じようなシチュエーションで、駅員の方に撮ってもらおうと思っていたんですけど、撮れませんでしたね。

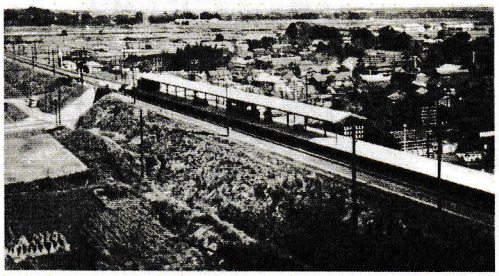


現在地に移って間もない頃の新駅舎と駅員
昭和 12（1937）年６月
馬場収氏所蔵

山下駅長：ちょっと微妙に位置が違うんですが、実質行ったメンバーで写真は、このような形のものは一応撮っていますね。微妙に位置が違うんですけども、あります。

山崎：これ、絶対道の真ん中から撮っているよね。

河野：人数は 15 人ですね、こっち。さっき 13 人だったけど、増えている。



大坂上から新日野駅ホームを望む
昭和 12（1937）年頃
馬場収氏所蔵

石嶋：これが 12 年で、あとこれ上から、坂上というのもおかしいんですけれども、階段がいまできています、その上辺りなんですよね。さっき河野さんからお借りしたやつは逆方向から撮ったみたいで、反対、西の方から南西部。河野さんのところはこちらでよろしいんですか。

河野：多分そのあたりだと思います。

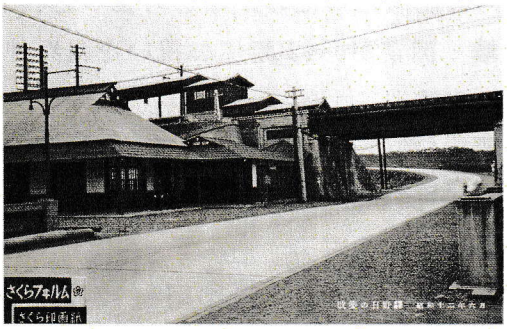
石嶋：ここですかね。今はちょうどみずほ銀行が建っているわけですけれども。

山崎：駅の印象は変わらないね。（笑い）ちょっと　伸びているとか、ちょっと掘られているとか、そんな感じで。

天野：昔と今と変わらないっていうの、日野駅は。

石嶋：これは小西六が、六桜社、小西六の方で日野駅と豊田駅の方が出ていたんですが、「改築の日野駅」というふうになっているんですね。だから本当に旧駅を持って来て改築したのかなと思ったんですけども、そうではないんですね。

谷享司：ちゃんと設計した人がいるから、伊藤滋さんって。（酒井哲著「日野駅舎　民家風デザインの謎」『多摩のあゆみ』129 号）

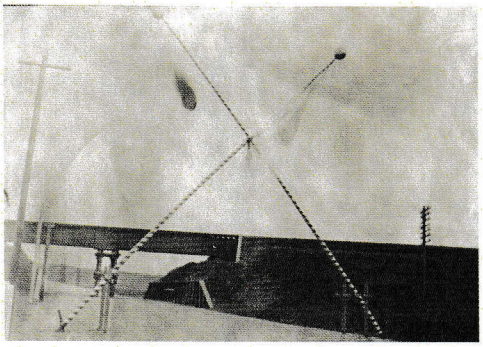


現在地に移って間もない頃の新駅舎と駅員
昭和 12（1937）年６月
馬場収氏所蔵

石嶋：それは今日、いろいろ資料もありますので、図書館なんかの方においでいただければまた参考にしていただけるんじゃないかと思います。で、ここをよく見てください、ここ、この辺をよく見ておいてください。

谷享司：出たの？　この間のか。

石嶋：これなんですよね。ここを谷さんと歩きながらこう、これちょっと本当に日野の駅の、駅だとしたらこちらに駅舎。これ昭和３(1928)年だとするとまだ駅舎はできてないんですけれども、今のこの日野駅辺りなんですけれども、昭和３(1928)年というのは昭和天皇の御大典というお祝いので張ったんだと思いますけれども。ここのところがね、この辺がちょっと。



御大典奉祝－甲州街道ガード付近－
昭和3(1928)年
佐藤彦五郎新選組資料館所蔵

谷享司：道路のガードの高さと、今のガードの高さと幅とを見ると合わないんですよ。それとノリ面の形も違うし。真ん中にないですよね。それでこの写真見ると今の駅のところで、ガードがあって、鉄骨の部分がどのぐらいできているのかと思ったら、ぴったりしかつくっていないんです、あれ。長さが。ちょっとバランスが違いすぎるんだよね、見ると。それで何というのかな、駅舎の方にもっと鉄橋が伸びているのかと思ったんですが、そうでもないみたいなんですよね。そこをちゃんと切ってあるので、ということはそんなことないということがあるんですけど。

石嶋：駅長さんにお聞きしようかと思ったんです。（笑い）我々が中に入れない部分ってありますよね。今ここが通路になっていて、何か休憩室とかって表示が出ていたのですけど、その空間っていうのがありますよね。で、その空間からこの上のこう、これは見えるものなんですかね。こういうところって何かいつ作ったとかっていう、よく表示がありますよね。そういうのって、この向こう側だから、上りだからこっち側だと思うんですけれども、何かこう表示されているものなのかなあということで。

山下駅長：あると思います。あると思いますね。

石嶋：だから最初はあんな広かったけれども、そのあとに付け足しているのかどうか。

谷享司：いや、それにしちゃ鉄骨切っちゃってるのがおかしい。

山下駅長：これだと何年頃の。その碍子があるということは電化された状態なんですね。

石嶋：というか、まだ昭和5(1930)年と言われていますので、これが本当に御大典だったら昭和3(1928)年なんですよね。

谷享司：これは旗で勘違いするんだけれど、これは明らかに旗が道路に立っているんですよね。

荻原：甲州街道沿いに旗が立っている。

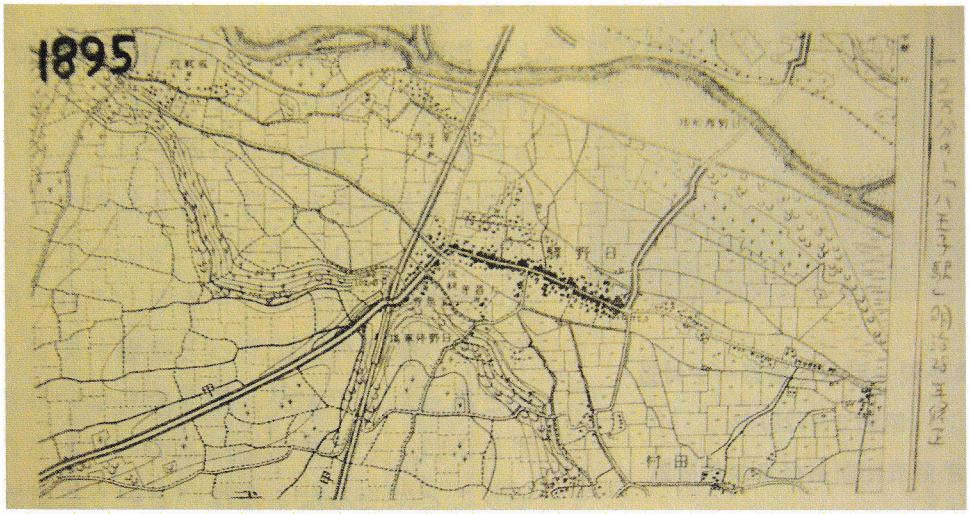
石嶋：まだ実際その、開通、北村さんにお聞きしようと思ったのですけど、道はつくっているけども完全に開通しているの？　日野橋はもうできていますから、そのあと整備されているところで、完全にできているのかどうか。

不明：いや、今のことだよ。

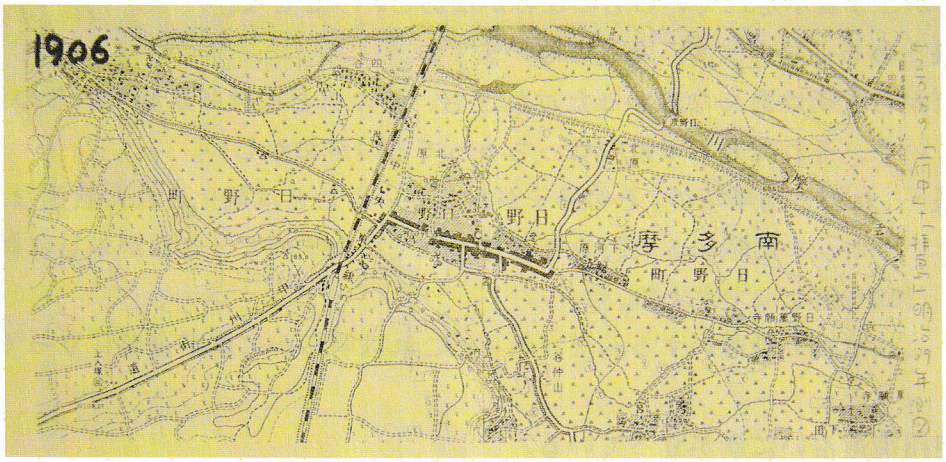
北村：ちょっと、はっきりはできていないんじゃない。7年とかって言う人もいますよね。ただそれはちょっと確認はできないでしょうね。7年頃だって。

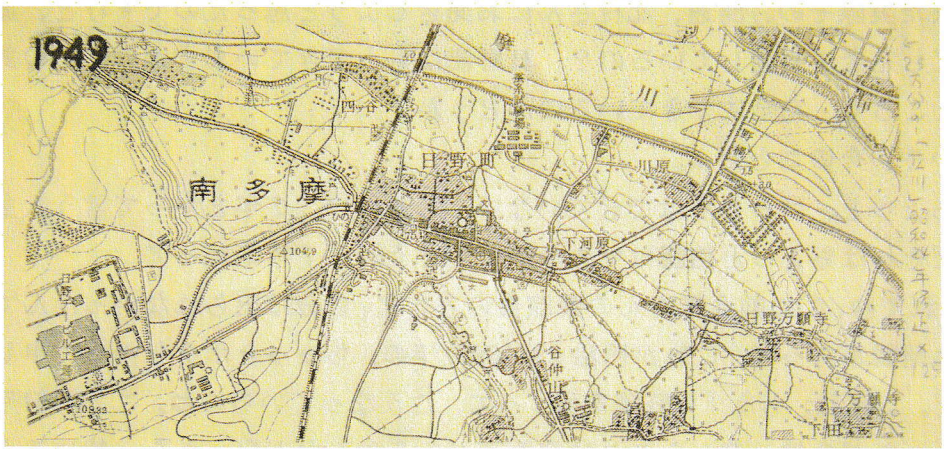
石嶋：それでね、この前今尾さんの講演会のときに、自分は出られなかったんですけど、いただいた地図があって、これが明治28(1895)年の。ちょっとボケちゃって申し訳ないのですけれど。これね、もう「日野停車場」って、こうなっているのね。ここが旧甲州街道。で、まだこっちが全然。昔からここは何か道があるのかなと思ったら、特にそういうあれ

でもないみたいなんですけど。



それでもう１つ、今度は明治 39(1906)年。ここのところがまだ、今の大屋のところですよね。今はこういうふうに沿ってこうできているみたいですけど。で、もう１つあったのが、今明治 39 年まできましたっけ。そうするとちょっと飛んじゃうんですよね、これが昭和 24(1949)年。これがもう日野坂になります。ちょうどこの間あたりがないので何とも言えないんですけど。ちょっと地図の方も参考までに。





そして戻って、これが本当にこの日野駅のそばのところなのかどうかはちょっと疑問にあるということで。

荻原：多分橋をかけるときに、真ん中にここというかね、連結するのにあそこにとりあえず仮支柱を立てて、それで取っ払ったんじゃないですかね。距離的に見て、距離がちょっとわからないですけどね、大体こう、こっちの方は遠くから撮っていますよね。多分橋は仮支柱というか、架設するのに多分そこで１回抑えて、そこでつなげたという感じだと思うんですよね。桁を。

石嶋：ここからスタートしているとしたら、長さ的には何かあるかなと思うんですね。そこはちょっと駅長さんに。

谷享司：あそこ、切れてる。石の上のところで切れてる。

荻原：あれ、あそこは昔は階段だったんですよね。

谷享司：階段です、あそこ。

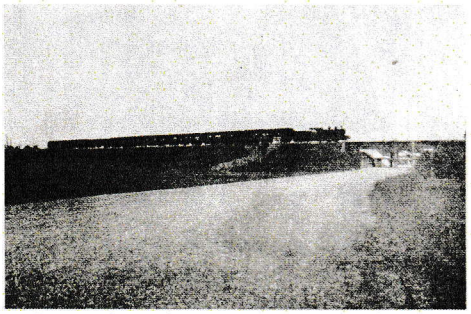
荻原：そうですよね、登り、ずっと。それで。

谷享司：まっすぐ突き当たって左に上がっていったんです。突き当たって左なんです。

石嶋：謎が。

谷享司：ちょっと長いなっていうんだよね。

石嶋：で、そんなのの逆から見たやつは。これは日野坂の方から写しているみたいですけど、これもやっぱり昭和の初めという感じだった、整備されて。



甲州街道日野坂から現日野駅方向を望む
昭和初期頃（推定）
佐藤彦五郎新選組資料館所蔵

不明：でも長い感じだね。

石嶋：ここのところは今の用水がこう流れている。もともとはやっぱりここへ、こちら側にこう来るのはこれしかなかったんですかね。ここの、このガードというのはもともとなかったみたい。最初からこう建てたときに、作ったとこにこういう形になっていたんですか。

河野：それはだから土手ですよね。道がなかったわけだから、土手。で、東光寺へ行く用水のところに、道路の上に道を作って、橋を作って通れるようにしてあったんですね。

谷享司：何かこれは聞いた話ですけど、四ツ谷のガード前にあった狭い道。あれがなかったときに結局、土手の上に踏切があって、荷車が通れないのでよく押してやっていたという話と、大正になってからあれを作ったんですよ。でもやっぱりこのガードは長いな、随分。

荻原：あるような気がするけど。

河野：あそこの民家がよくわからないんだよね。

谷享司：いや、反対側が切れているの。ということはこれは架け替えたんじゃないの。新しくしたんじゃないかな。

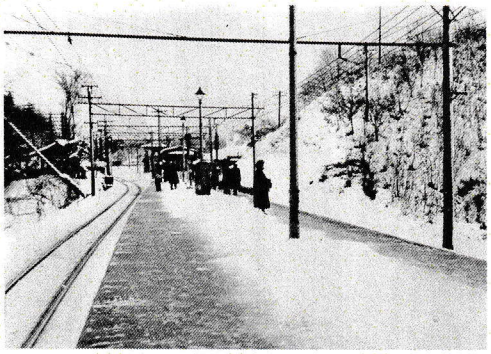
河野：そうだね、そこで、確かに真ん中に。

荻原：あるね、柱がね。

谷享司：ということは両側をもっと狭めてあれじゃないの。真ん中を外したんじゃないの。

荻原：それと、あれなんですかね、一番最初はこうだったんだけど、道路が真ん中に来ちゃったので架け替えたということなんですかね。短く。（笑い）

石嶋：では大体その、これからは皆さんに近い写真に。（笑い）昭和 20(1945)年代にいってみようと思うのですが。今日は三浦清司さんにもお出でいただいているんです、ここらへんから。もう実際ホームの上ですかね、ここらへんちょっと三浦さんに何かお話をいただきます。



日野駅ホーム　－豊田駅方向－
昭和 20(1945)年代中頃
三浦清司氏撮影

三浦：昭和 6 (1931)年生まれです。皆さんよりずっと年が多いので安心しました。この当時は毎年のように雪がたくさん降っていましてね、特にこの、私、ここから大塚というところがあるんですよ。そこのところにね、大学がそこにあったものですから、毎日そこへ通っていたんです。何しろ寒くて寒くてね、一番評判の悪いのが日野駅だったの。それで確か一番奥の方に建物があったのを記憶しているんです。なんで建物がそこにあったのかよくわからないんだけど、多分向こうの方から線路をくぐって、向こうから近いからさっとこう上がってくる連中が結構いるんですよ。キセルをやっているという意味じゃなくて、ぐっと回るのは遠いから、向こうから来たんですよね、多分。そこにこう何か監視なのかわからない。

荻原：踏切がありましたよね。

谷享司：あの手前側の建物って、ワイヤーを上下する駅員さんがいたところじゃないんですか。

河野：あれを見たらさっき言ったトイレと、駅員のところが最初あったんですよ、建物が確かあそこの端に。

天野：あそこから上がる場合には踏切番がいたから、踏切番の人に定期を見せて、俺なんかも向こうから上がったよ。

三浦：ただ、余り乗客には関係がないものですから、中をがらっと開けてみてね、どうだなんてそういうケースは全然いってないんで、ただ変なうちがあるなあというところですね。（笑い）

山崎：純真な大学生だったんだ。（笑い）

三浦：それで、雪がたくさん降りますと電車が並みのスピードでなくなっちゃうんですよ。それで、これはわからないではないんですけど、乗客の方もばかにスピードが落ちて

きちゃったなんてね、ちょっと心配しているみたいでいろいろありましたね。たったこの絵だけで、私はここからもう新宿までダーっと行っちゃいますから、それから山手線に乗って大塚の駅で降りちゃって、そういうふうにやるだけなものですから、本当はこの駅の写真を見ながら、当時のこの日野駅の周りがどうなっているのか、そういう写真はないけどね、ほとんどよく覚えています。それが非常に問題があるの。今とほとんど変わらない。

日野の駅は魅力がない。なぜなればほかに、私も大塚だとか向こうの方に通ってましたけども、みんな途中で、ここで突っかかっちゃうんですよ。結局食い物屋はいろいろあるし、それからパチンコ屋も28～9年のときだって結構ありましたよ。これはちょうど同じときに、大雪が降ったときに、大塚駅の国鉄の、これが駅です。こんなに立派な銀行もあるしね。銀行なんか日野にはなかったですよ。そういうふうなところですね。

それからこういう電車が通っていたんです。チンチン電車と称する。私はチンチン電車に4歳ぐらいのときに乗ったことがあるんですよ。どうするのかってね、さっきから問題になっていました旧停車場というのがありましたね、昔の。あそこから八王子に行くんですよ。で、八王子に行きますとね、これが路面を通っているんですよ。通っているんです。それでびっくりしてね、こういう幹線の電車のほかに、まちの中にこんなのが通っているっていうんで、いや、子どもながら面白かったですね、乗っかるのが。金は全然払ったことはないんだけど、何だか知らないけど乗っかったよ。窓から首を出してみたりしてね、非常に面白かった。

それからすぐそばに、この当時日野なんかには全然ないんだけども、駅の隅に公衆電話があるんですよ、こういうやつ。電話のかけ方も知らないんだものね。だけど設備はあるんですよ。誰かが使っていたんでしょうね。つまりこういうところがもう全然田舎でね。もうこっちへ行くと都会。もうがっかりしちゃってね。まずこんなところには長くいるところじゃないと思っていた。

石嶋：三浦さんすみません、日野のここなんです、この写真でね、これがあれですよね飯綱権現。

三浦：飯綱権現。一番左の方のね。

石嶋：で、ここに写っているのがさっき荻原さんから教えていただいた、これ信号所ですかね、ここに。

三浦：そうですね。

石嶋：で、手前がその詰め所みたいな。踏み切りはこれ、ここら辺なんですかね。

天野：あれはね、踏み切りのあれかもしれない。

河野：そう、踏み切りのかもしれないですね。踏切番の人がいて。

天野：一番端にあったことはあった、もっと上に。

三浦：人のいた気配はほとんどないんですよ。

谷享司：いや、あそこはこういう回転式のあれで、ワイヤーが両側で止まっててぐっと降りるやつだったんだね。遮断機がついていて。回してるおじさんがいて。

山崎：見ていたんだ。（笑い）

谷享司：面白くて。

石嶋：実は荻原さんからそういう、１枚あるんですよね。この中に踏切が。これだ。ちょっとこう、ああだめだ、すみません。実はここのところにね、踏み切りのこう降りるやつ。

河野：遮断機。

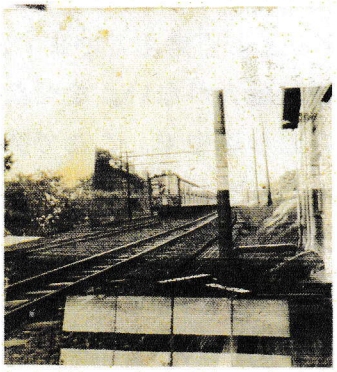
石嶋：そう。

谷享司：何となしに見えるな。

荻原：あの信号所の裏じゃないかな、多分。

河野：踏み切りの写真あるの。

荻原：いや、信号所じゃないでしょう。多分、踏み切りじゃなくて信号所の裏だと思うんですよ、これ。信号所の裏から撮ったやつ。



信号所付近
昭和 30(1955)年前後
荻原親雄氏所蔵

石嶋：重なっちゃっているんですけど、河野さん、あれですよね、ここの。

河野：それが信号所ですよね。

石嶋：こっちが信号所か、踏み切りはここにはない。

河野：踏み切りはなかったと思います。

荻原：それで何か線がこうなるのが、ワイヤーか何かだ。昔は何かワイヤー付きの何か、切り替えのレバーのワイヤーだと思うんですよね。



日野駅ホームから雪の日野
坂、東光寺方面を望む
昭和 20(1945)年代中頃
三浦清司氏撮影

石嶋：じゃあ戻ります。そうしたらば、これで。あと三浦さん、もう１枚あるのでそれをまとめて。三浦さんの、これですね。これは駅のホームから東光寺、いや日野坂なんかの方を撮った写真なんですけど、これをちょっとまた三浦さんに教えていただいて。

三浦：日野も工業化の道をたどっているんですね。（笑い）それで、一生懸命工場を作ってというようなことになったわけですけれども。ところがですね、足がないんですよ。ほとんどの人が歩いて行くんですね。自転車で行く人も余り知らないです。

谷享司：雪が降るから。

三浦：普通のときでも自転車で行く元気がある人はほとんどいない。何しろ自転車がボロだから。上まで行けないの。それで歩いて行ったのを覚えていますね。

谷享司：あ、バスがいるわ。ボンネットバス。みんな歩いてるなあ。

山崎：バスいるけど歩いてる。

三浦：いい加減あとからバスができたように思います。

天野：ああ、そうかもしれないな。

山崎：みんな日野自動車に行ったりしているんですか。

谷享司：どうみても日野ルノーじゃないの。

荻原：日野自動車と神戸製鋼？　神鋼電機と。

三浦：みんなその坂の上。坂の上に行く人は全部ここのところをテクシーか。（笑い）すごいのは駅前にタクシーが、小島さんという人がタクシーをやっていた。どこまで行っても５円。遠かったって何だって関係ないんです。１回乗ったことがあるよ。これはすごかったね。円タクっていうけどね、それどころじゃないね。

谷享司：これ、全然関係ない話だけど、ここの建物が写っているじゃないですか。

三浦：これは平野さんの、不動産屋の建物です。

谷享司：不動産屋の建物ですよね。それでそろばん塾があった。

河野：田中珠算塾。

三浦：そろばん塾、そうですね。

天野：田中さんのところかな。

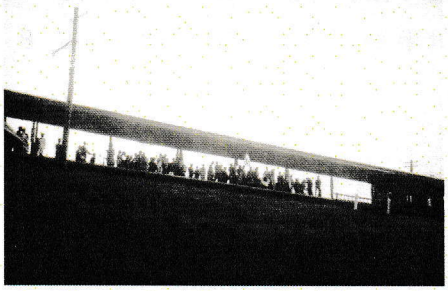
谷享司：思い出したよ。

井上博司（大坂上）：じゃあ今もビルを持ってる？

不明：うん。

石嶋：これ20年代当時だったんですけど、三浦さんすみません、その前に見ていただかなきゃいけないのは。これ、戦時中ですね。

谷スエ：出征兵士。あたしたち、行ったね。みんなして行きましたよ、送りに。駅の向こう側に。まだ今みたいに発達してませんでしたから。



出征兵士の壮行
昭和10(1935)年代後半
日野市郷土資料館

石嶋：この方が出征される方ですね。

谷スエ：ええ、それでこちらの前でね、みんなもう出征するたびに学校出てみんな応援に行ったの。お見送りに行ったんですけどね。

石嶋：今発言していただいている谷さんの、一番上のお兄さん、茂雄さん。昨年亡くなられましたけど、『四谷のむかし』という本のなかで、それを、一番後ろに婦人部というのですか、の方たちの日誌みたいなのがあって、いつ誰々さんを見送りに行ってとかいうのが出ていましたですね。ずっとこう、河野さん、ちょうど今の、ここが待合室ですかね。

石嶋：がらっと飛ぶんですけども、それで河野さんの名前を出したんですが、ということはちょっと時代は30(1955)年代なのですけど、ここですよね、さっきの。

河野：そうですよね、待合室。

石嶋：向こう側、反対側から。で、こちら側が山下堀があって、ここが棒屋、三田さんで、河野さんのお宅がここ。ちょうどここが今みずほ銀行が入っているビルあたりという。で、さっき三浦さんがホームから写した写真を見ていただきましたけれども、もう１つ。

これが古谷庫太（くらた）さんという方　の奥様なんですけどね、今もご存命ですけれども、ホームの上。ここの光景をちょっと覚えておいてください。



登校前の少年たち
－日野駅ホームを背景に－
昭和 30(1955)年前後
河野和正氏所蔵



日野駅ホーム　－下り線－
昭和 30(1955)年代
古谷庫太氏撮影

どれでは、今度は動画です。短いですけども。これは東さんという方が昭和 20(1945)年代後半から 30(1955)年代とかを８ミリで撮られたやつをお借りしてＤＶＤ化したものです。

東尚士氏撮影の８ミリ映像（ＤＶＤに変換）を上映

谷享司：絶対に改札は木製なんだよ。鉄パイプの手すりがあったんじゃない。

石嶋：もう１度見ますか。ここの駅舎、入ります。ここが甲州街道、おそば屋さん。立川方面からさっきの女性がこう、同じような。このあと、ここはちょっと疑問が残ります。

河野：ちょっといいですか。右手に写る２階家が信号所で、フィルム自体が左右逆にかかっているんじゃないですか。この部分。

石嶋：そうですね、こういうふうじゃないですよね。逆なんですよ。ただそれをちょっと問いただすというか、お聞きしようと思ったら、撮られた東さんが２年前に亡くなられちゃったんですよ。だからもうこれがもし。

山崎：ここプリントスクリーンで撮って反転できないんですかね。

天野：この頃の写真は、終点は浅川駅なんだ。

河野：浅川ですよね。

天野：終点は。今高尾止まりだけど。浅川止まりだったんだ。

石嶋：ここに写っている車は、井上さん、何ですかね。

井上：わからないです。
山崎：早い、即答して。（笑い）
石嶋：残念でした。
谷享司：即答はできないな。
石嶋：１つありますよね。
山崎：ある意味わからないので即答する。
谷享司：あれ、車というのはトラックです。
石嶋：タクシーのあれですかね。
谷享司：いや、タクシーじゃないと思う。

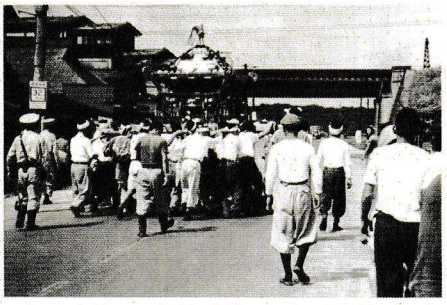
石嶋：もう１つ、松本さんはいらっしゃってないのですけど、これをまた使わせていただきましたけれども、ここにこんな売店があって、ここに自転車があるとか。



日野駅
昭和 26（1951）年
松本保氏撮影

天野：これは最近だな。
石嶋：日野駅って書いてあるところに三輪車がある。
山崎：河野さんちのとかじゃないかな。（笑い）
河野：そう言ってる。
谷享司：そのうち貼られちゃうよ、「駐輪禁止」って。（笑い）

石嶋：これは今日お借りした、この志村さんのお父様、章さんが撮られたやつですね。お祭りのときですかね。
山崎：真ん中に柱があると神輿が通れないからだと思うんですよ。
石嶋：ここは若い人というか、学生さんにぜひ見てもらいたいんですが。ここ、おわかりになりますか。速度制限って書いてあるのかな。何でこれ 32 という。
山崎：何で半端なの？
谷享司：いやマイル計算しているから。
石嶋：どうしてマイル計算にしているか。
天野：この 32 っていうのは高さ？　３メーター 20？（笑い）
不明：いや 32 キロって書いてあるから、32 キロの高さって。
天野：32 キロ、キロか。



宮神輿渡御　－日野駅前－
昭和 29(1954)年９月
志村章氏撮影

谷享司：重量制限か？

石嶋：昭和 29(1954)年なんですよ。ちょっと谷さん解説してください。

谷享司:解説ですか。昭和 29(1954)年ですと、ここら辺は立川基地がすぐにありまして、進駐軍が、米軍が来ていたので、日野駅の看板も下側に「Hino station」って書いてありますけど、それと同じで、32 キロっていうのは 20 マイル。1.6 キロなので、1 マイルが。そうすると時速、向こうで言う 20 マイルで走行しなさいという米軍向けの表示ですね、これ。

山崎：そうしたらマイルって書いておけば。

谷享司：だから、米軍用の表示というか、米軍の表示をそのまま日本用に変えちゃったから、速度が 32 キロになった。

山崎：訳してあるだけってことですか。

天野：なるほど、マイルだな。

谷享司：もともとがマイルだから。(笑い)

北村：進駐軍のトラックが通っている写真がありますよね。残っていますよね。

石嶋：それで、戦後間もないころその進駐軍にね、日本が戦争で負けたっていうのはわかります？（笑い）それで、車がもう何というか、身勝手というか、すごいスピードでここを駆け抜けるんですって。で、亡くなった方が何人もいらっしゃるんです。そういう事故にあわれた方とか、そういう方がいたということをちょっと覚えていてもらうといいんじゃないかなと思います。

山崎：そういう気晴らしに来てたんじゃない、日野に何しに来るのかなと。

石嶋：で、今度は飛びます。これちょっとカラーで珍しいですね。お正月ですね。前に「まちかど写真館」で、八坂神社の前にお飾りを付けた車が走っている写真を掲示したんですが、ちょうどその道を歩いて駅に近づいたところで、戸高さんという方が撮られたものです。この当時としてはすごく珍しい。まだ出たてのフィルムだったそうです。



正月の朝　－日野駅前－
昭和 38(1963)年 1 月
戸高要氏撮影

山下駅長：ちょっと不勉強なのですが、この写真の中で正月のシーンというのがわかるというのは、どういうところでわかりますか。ちょっと、自分はわからなかったんですよね。

石嶋：そうですね、ぱっと見たらわからないですよね。

山下駅長：何か教えていただけると。

山崎：みんな昔って着物なのにね。情報提供者、写真の提供者が。

石嶋：ここからではわからないですかね。これアメ車でしょう？　アメ車は付けてかな？

山崎：付けてる。(笑い)

石嶋：じゃあ、当人から聞いているから自分がわかったので、実はこれと対になってい

るんですよね。ちょっと時間がかかるんですけれども。

谷享司：あれで正月だってわかったのは。

山崎：実は言っているだけだったとか。

石嶋：これなんですよ、これを撮ったあとに日野駅に向かっているんですけど。ちょっといろいろ開いてみたら、なくなっちゃったかも。いっぱい開いちゃったんで。（パソコンのオーバーワークのため）ちょっとここで少し一服していてください。

岩田（駅員）：すみません、先ほど大塚まで通っていらしたとおっしゃっていましたけど、その当時新宿までって何分ぐらいかかったんですか。

三浦：約１時間ぐらいかかっていました。６時半には私はうちを出まして、国立大なものですから、授業は８時から始まるんですよ。１時間半ないとちょっとやばいので。

岩田：その当時１時間に１本ぐらいは走っていた？

三浦：ええ、もう決まった電車以外は動いてないです。

山崎：それしか乗ってない。

三浦：混んでいたの。したがって、知っている人というのは、その電車に乗っている人しか知らない。

三浦：ああ、もういつも。

山崎：すごいローカル線の話を聞いているみたい。（笑い）

岩田：その当時も値段的には、水準でいったら今と変わらないぐらいの？　ちょっと高かったりするの？

三浦：学割というのがあって半額以下でしたからね、お金は安かったと思いますね。

石嶋：ちょっと時間かかりますから、お話になっていてください。

三浦：１つだけ質問。80以上の方がいいんですけど、日野駅に昔扉が付いていたはずなんですよ。今ありますか。

渡辺：どこにです？　改札？

三浦：家の中に。大学生のときに、酔っ払って、うんと飲みすぎて帰ってきたもので、閉まっちゃって出られない、外へ。で、改札出てから出口が二通りあるでしょう。昔はあったんですよ。閉まっちゃったの。

不明：あそこに扉があったんですか。

谷スエ：昔は木の枠があった。

三浦：夜遊びができなくなっちゃったの。

滝本：終電になると、ここは戸を閉めちゃうんですね。

三浦：そうですね、今はフリーパスで出られる。（笑い）

滝本：そう言われると昔はそうですね。

三浦：何か記憶がある人はいますかね。古い、そんな時代のやつは古いと。

石嶋：すみませんね、お待たせしました。ここ、わかりますかね、これ。

渡辺：あ、付いてる。

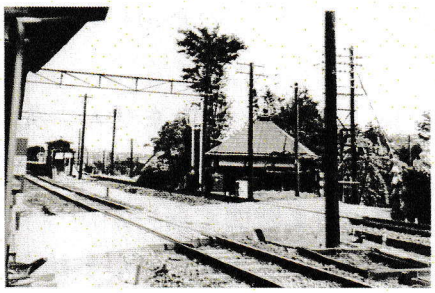
石嶋：これ、お飾りです。ちゃんとね。でまあ正月のということだそうです。

渡辺：ああ、やっと解決。（笑い）

滝本：38年ごろだな。

石嶋：そうしましたら今度は、先ほどの踏切のお話が出ましたけれども。これ、ここのところでしたね。こちらは坂下地蔵の地蔵堂です。

山崎：踏み切りはなくなったけれど、この道自体は残っていましたね、結構。私が小さい頃ぐらいまで。



日野駅の南側にあった踏切
－坂下地蔵堂脇－
昭和30(1955)年代後半
日野市郷土資料館提供

石嶋：50年代ですね。

天野：ずっとね、最近まで残っていたね。

石嶋：さっき写っていたのはここですか。

河野：それはだからホームの端っこにあったトイレと、その向こうの事務室、あの駅長室があったのね、一時。それでそれが壊されてもっと手前へ伸びたんですよ。ホームが。

天野：あの場所はよく通らせてもらったよ。学校行くのに。（笑い）

石嶋：今日カメラマンの井上さんがいらっしゃいますけど、何と中学１年のときに撮られた写真です。ここに写っているかな、ここかな。



日野駅
昭和46(1971)年2月8日
井上博司氏撮影.

井上：そのときはもうないんですよ。それは自動だから。

荻原：これはこういうやつに代わっちゃっているから。

井上：で、今その「特快」って書いてあるところの、電車のすぐ右に階段があるんですよ。いや左。

谷享司：そこに柵がしてあって階段があるんです。

山崎：ああ、あったあった。

谷享司：大体山の上から来た人はあそこまで登ってきたんだよ。

井上：そこが定期を持っている人の通学路。で、踏切番がいた頃はなかなかできなかったんだけれど、もうこれになってからはみんなおおっぴらにやるわけ。

荻原：自分もよく利用させていただきましたよ。（笑い）

山崎：だからみんなあっちに改札がほしいって言うんだ。

井上：いや、本当に西口に改札があると実践の子が。

山崎：実践の子は相当楽ですよね。

井上：そうそうおっかなくないんですよ。

石嶋：ここって誰か住んでいたんですか。

井上：あ、それ、住んでましたよ。

河野：何人か住んでいました。入れ替わり立ち代りですけれど。

天野：この電車が通っている頃は、ここへ改札口が何ヵ所かあったの。

石嶋：お堂なの、これお堂ですよね。

河野：お堂でその横。そこが畳の部屋があって、行ったことがあるんですよ。今自治会。

谷スエ：集会所があって。

山崎：自転車置き場ができてあきらめたんですよね。

石嶋：ここが飯綱さんの階段があったんですね。

河野：ちょっといい、左側の下の方、そのもう少し左。矢印を下にしてください。左側に崖がありますね。これはだから人工的に埋めたもので、本来は、ここは全部谷で、旧駅までずっと谷が入っていたということです。だからここの家が建っているのは、多分形からすると入り小屋だから、江戸時代からの農家の建物で。だから江戸時代から多分ここに家があった。その低さが昔の低さですよ。

石嶋：これはお蚕さんをやっているの？

河野：かもしれないですね。

荻原：ここは竹内さん。

谷享司：いや、蚕をやるやらないの問題じゃなくて、わら屋根というのは下で火を燃さないとだめになっちゃうので、必ず煙抜きが付いているんです。

石嶋：じゃあ別に蚕を飼っていたということだけのじゃない。

谷享司：蚕を飼うからではない。蚕を飼っている家というのは、大体天井が丸の竹だとかそういうので、すのこ状になっているやつがある。

石嶋：ここにまだ拓銀が。

渡辺：今はなき。（笑い）

石嶋：今は清水組の。そして、ここへもう１枚。これ品川さん、判子屋さんが撮られた写真があります。これはもう自動ですかね。

不明：自動になっている。

井上：もう埋め立てられちゃったんだ。

谷享司：でも？　付いてないよ、まだ。

天野：これはもう新しいね。

荻原：新しい。でもさっきのよりはあれじゃ

ない。

谷享司：さっきのよりは古いですよね。

山崎：古いよ。

谷享司：階段のところに柵が付いてないよ。

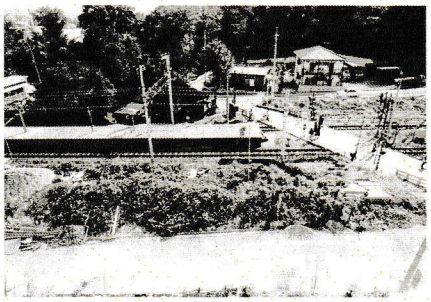
荻原：ただもう向こうを埋め立ててあるから。

石嶋：昭和 52(1957)年です。

谷享司：じゃあやっぱり不便だから柵を取ったのか。

井上：そうそう。

天野：何せ日野駅ができた頃は、谷間の上にできてるって感じだったからね、日野駅は。



封鎖される前の日野駅南踏切
昭和 52（1977)年
品川明雄氏撮影

石嶋：これは道が。

荻原：これまだ工事をやっているときですね、実践に抜ける道ですよね。

石嶋：そうしたら、じゃあこれは 52 年でしょう。そうしたら右側が。これは 30 年代後半。そうですね。

河野：あのホームのところに屋根がある、その右側の左側にまた小さな、もうちょっと左側に持っていってください。もう少し左。そこに建物があるでしょう。これがだから新しい駅員の事務所です。さっきの、最初踏切のそばにあったのはここへ持ってきたんです。

山崎：ああ、むこうをつぶして。

河野：つぶして。それでむこうを、ホームを広げて、それを延長して。それからその右側に、その下線路の、その下、矢印の下。ちょっと階段があるんです、そこに。縦にある。そこはその事務所へ上がる階段があって、そこが。さっき最初の写真の頃で、斜めにずっとありましたね、交通路が。あれからずっと上がってきて、そこまで来て駅員さんはそこから上がってくると。それで 3 時頃になると荷物電車が 1 両来て、そこで新聞を下ろして、新聞をそこから今度は共同して下に交通路がある。それで台車で駅まで運ぶのをやっていましたね。昔、子どもの頃。



早朝の日野駅
昭和 38(1963)年頃
日野市郷土資料館提供

石嶋：それでは、今度は。これは昭和 30(1955)年代ですね。朝夕だけこういう、こっちを開放したという話を聞いたんですけど、そうなんですかね。通常はこっち側で、混雑時だけここのを開放したと。

河野：そうかもしれないね、多いときにはね。だから少ないときはその奥の、母屋の側のこっちだけ。

石嶋：これは何かオリンピックの、39年なんですけど、ちょっと前に予行練習みたいのをやったときなので、天気がいいんです。本番の時は何かね、天気が悪かったみたいですけど、ちょうどさっきも出ていましたけど。ここのところにじゃあ階段、向こう側から、東側から登って来ると、この中に空間があった？

谷享司：空間があったの。

山崎：今は道なんですよね。

谷享司：そうそう、今だからトンネルになって、通路になったところは。

石嶋：じゃあここをつぶしているんですか。

山下駅長：もう１個前のももう一度出していただけますか。

石嶋：もう１個前、これでしたっけ。

山下駅長：はい。ちょっとお伺いしたいのですけど、どうしても皆さんの方がお詳しいので、すみません。その駅のホームに上がる通路というのが、今旧年のオリンピックの、さっき言ったようにそこの手前のところを上がっていって、そこのこっちから階段を登っていくというのがあるわけですよね。ごめんなさい、それだけだと思ったら、先ほどの話だと混んでるときにそこを使い、普段はっていうのは。



東京オリンピック自転車競技予行
－日野駅西－
昭和39(1964)年９月
品川明雄氏撮影

河野：混んでいるときはそこの部分ですよね。屋根はこっちへ出っ張っていますね。あの部分にも出入り口があったんですよ。その奥にも出入り口があって、駅員が立つじゃないですか。改札口じゃないから３つ４つ出ちゃうわけですよ。普段は１つで、朝夕はだからもう２つぐらいこっちにあって、そこへ駅員が立って。だから切符を。

山下駅長：普段の改札口は今の駅のこれが付いているところに。でもホームへの導線はいずれその臨時で改札されたそこの。

河野：まっすぐですよね。

山下駅長：一緒に合流してこうぐっと。

石嶋：中にこう入っているんですよね。

河野：そうです、それでそこにありますね、ほら。あそこへ駅員が四角の中に立って売っている、切符を。

山下駅長：じゃ普段はそこは開いてないわけですかね。左側に行ってぐるっと回って。

石嶋：それで、河野さんからお借りしたやつで。

山崎：それもまあ、階段は１本なんですか。あくまでも階段は１本。口が広いだけで。

石嶋：これが今の東側の、もう作っているんですね、これ。

山崎：今の駅の。

山下駅長：それがやがてこちらの。

石嶋：これは西側から。

河野：ホームの下が空間になっているんですね、吹き抜けになって。

山崎：透けて向こう側が見えている。

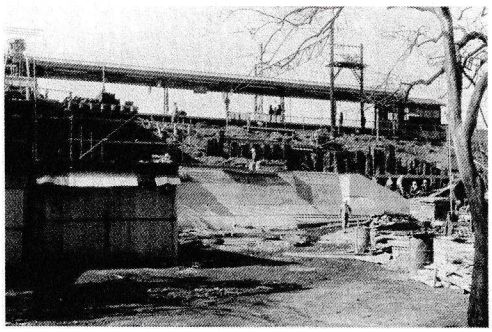
河野：だから私は上り線から降りて下り線まで行ったりとか。（笑い）いや、だからそれは下を通って行ったり、何かそういった、遊んだ記憶があります。

山崎：駅の近所の人って怖い。

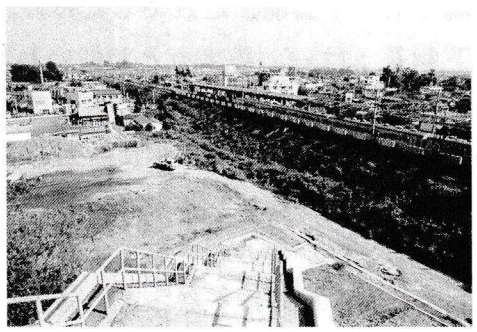
石嶋：そうすると今度は日野駅の西側の区画で、階段がここへ。ここら辺がまだ。まだここのところがない。

山崎：階段だけ変わらないって怖いですけど。

石嶋：それで変わったのが、もうここ、今。抜けるところを作っているんですね。区画整理。ここはあれですかね。



日野駅新昇降口建設工事
昭和 51（1976）年頃
河野喜映氏撮影



日野駅西区画整理事業
昭和 52（1977)年
品川明雄氏撮影

河野：生協です。

石嶋：ということはここに煙突がある、これが藤野。

河野：藤野のパン。

石嶋：最初は藤野缶詰工場。それでここが薬王寺ですよね。ここへ拓銀が。電車がここ。ここはゴルフ練習場。梨屋。

谷スエ：松本梨屋さん。

石嶋：あと見てないのは。

谷享司：今の写真で、四ツ谷方向ってやっぱり田んぼばっかか。

井上：田んぼだね。

谷享司：田んぼなんだね。

山崎：田んぼの先にうちなんだけど。（笑い）

石嶋：あと見てないのは。あ、これ見てなかった。これは志村章さんが撮られたやつで、ホームから東側を見ているところなんですけど。これ、２枚の写真を谷さんに合成してもらったんですが。わかりますかね、ここは宝泉寺の山門ですね。ここは大昌寺。一小がもうここへ。

谷享司：懐かしいな、喫茶ムーランなんて。

不明：ムーランがあるの。
渡辺：何、そんな喫茶店があったの。
井上：危ない喫茶店。（笑い）
石嶋：ここは花輪さんですか？
河野：花輪さんですね。



日野駅ホームから東側方面を望む
昭和 30(1955)年代
志村章氏撮影

石嶋：それでこれは何。
井上：違う、花輪さんじゃない。
天野：栗山さんか、日野さんかどっちかだな。
石嶋：河野さんのところって。
河野：そこの２階家とその向こうの蔵。
谷スエ：あの蔵がそうですよね。
石嶋：いまじゃここら辺にこうできてますね。
河野：そうですね、母屋のところにだからあれが入ってますね、何だっけ、みずほが。（笑い）
山崎：じゃあこの辺の家は全部つぶれて道になっているんですか。
天野：そこら辺に川が流れていたよな、どこかな。
石嶋：そうですね、ここのところですよね。床屋があってその間に。
河野：そう、そこに川が流れて、用水。床屋とうちとの間ですよ。
石嶋：ここのところがじゃあ旧甲州街道がこう。
河野：はい、そうです。
天野：右にある松は宝泉寺の松？
石嶋：そうですね、宝泉寺ですよね。
天野：じゃあその辺だね、川が流れていたのは。ホームの下を。その川でよく遊ばせてもらったんだよな。川止めてさ。（笑い）そこへちょっと水を入れて、怒られて。
山崎：怒られるわ。遊び方の規模がでかい。ばしゃばしゃやったわけじゃないんですね。
天野：それで朝、学校へ行くと一小の先生に怒られて、みんな立たされてね。

山崎：昨日田んぼに水を入れたやつがいますって。

石嶋：　大体今展示している写真を一通り見ていただいたんですけど、何かこれは言っておきたいとか、伝えておきたいということがあれば。小島さん、長い時間すみません。何かございますかね。あの写真のことをおっしゃっていただければ、また持って行きます。なかなか見られないのは、この写真がね、について。

小島：旧駅のホームにずっと、陛下が多摩陵へ参拝のときはもうみんな、５、６年生の人がみんなお見送りね。

山崎：お召し列車が通るんですか。

小島：山がこういうふうにありますよね、そうするとお召し列車がお通りになるのを見えなくなるまで最敬礼をしなきゃいけないなんて言われてね。中は陛下が座っていらっしゃるんだけども、当時は見ましたね。軍服で陛下がいらっしゃったのを。それで大概お座りになっていてね、それで１回は立っていらっしゃってね、ちょっと中でこう、そういう感じに見えたんですよね。そうしたらその当時には畏れ多い言葉ですけど、子どもでしょう。ですから「あ、今立っていたのが見えたわ」なんて、（笑い）そんなあれでしたよ。それでずっと向こうへ行きますと山がこういうふうになっているから、もうそのお召し列車が最後見えなくなるまでこうやってしていないといけない。そういう思い出があります。ホームがずっとあれでしたけど。山のね、ずっと長かったものですから。２、３年生ぐらいがずっとみんなで並んでね、それでお帰りになる時間はまたね。そんな思い出がありますけども。

河野：ちょっとすみません、この写真ですけど、崖をこう切ってありますね。ここが谷だったんですけど、崖を切ってあって、ここをよく見ると根っこが出ていますよね。だから一番崖の高いところがここなんですけど、こっちはやっぱり自然面が近く、自然のところが出てきているわけね。で、これで、さっきの荻原さんのあれ。だからこの写真を撮った位置なんですけどね、推測すると荻原さんの遠景のやつは。

山崎：自然面のところに登って撮った。

河野：そう自然面のところに多分登って撮ったんで、そうですね。ですからここから自然面がくるでしょう、この傾斜が生きているんですよ、昔の。このあたりから確かによく見えたんです、こっち側が。だから撮ったのはもしかしたらこのあたりから撮っているかも。こっちはこれよりも高くなって、崖がこう高いところを切っているんでね。だからこのあたりから撮った可能性があるのかなと思うんです。あの明治の写真は。

小島：今はもうないでしょう、この右側には。明治天皇がいらっしゃった松の木が。

石嶋：ここでさっきの日野停車場で「祝」何とか何とかって書いてあったのがあるんですけど、それを逆転して、反転して。何て書いてありますか。

谷スエ：陸軍。

石嶋：陸軍、あ、高木かな。

渡辺：あ、高木って書いてある。

不明：陸軍でしょう。

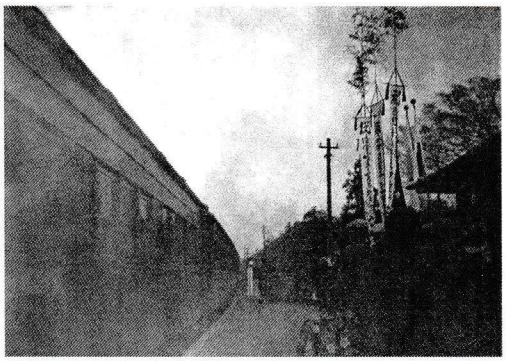
河野：あ、本当だ、高木だ。

石嶋：やっぱり出征じゃないかな。高木昂さんじゃないですよね。出征するときにね、昭和5(1930)年ぐらいですよね、15年戦争が、満州事変であるとか。

三浦：入隊、ですかね。

不明：12年入営と書いてありますよ。

三浦：何回も行ったことあるけど、こんなものやったことない、持ったことがない。みんな小さい小旗。



写真を反転すると…。

石嶋：ということはかなり前ですかね。高木って読めますかね。

山崎：私、松木って読めるんだけど。

石嶋：これ、松木？

山崎：あの彫るっていうあんな字じゃないですかね。

石嶋：ただ「祝陸軍」。

山崎：陸軍、将って書いてあるんじゃない。

三浦：将でしょう。

不明：将は見える。

不明：陸軍、将だな。

山崎：あれじゃない頃でしょう。徴兵制とかじゃない頃でしょう。だから士官学校みたいなのに入っているんですかね。

北村：「入」っていう字が見える。

不明：入隊、入営、入営だ。

井上：その辺のお寺さんの墓を荒らしてくるようだ。

山崎：高木さんちで調べてみて。

北村：「吉」が見える。

石嶋：これ吉。

不明：吉ですね。

北村：この辺がちょっとわからないんだけど「陸軍入営」と書いてあると思う。

山崎：反転してみるものですねえ。

荻原：近所に高木さんっていたんですよね、でもね。

山崎：そこのうちの可能性が高いですよね。

渡辺：でもあれだけ立派な旗だから、高木歯医者さんだね、きっとね。

石嶋：皆さんからお借りした本当に一部分というか、郷土資料館のお金をお借りして作らせてもらっているんですね。それが今40点貼り出してあるんですけれども、ほかにも実はまだあります。そういうものをまた見ていただく機会を設けたいと思うのですが、今回

は長時間にわたっておつきあいいただきましてありがとうございました。宿題を提供いたしましたので、ぜひ。（笑い）あれですよね、駅長さんは今度多摩地域の図書館大会などを考えて。

山下駅長：そうなんですよね。

石嶋：でもお話なさって、関心をお持ちの方は、調布市のたづくりというところで、そこでお話になるのでお聞きいただければと思います。またいろいろな情報を教えていただければと思います。では最後に館長から。

渡辺：本日はどうもありがとうございました。本当に貴重なお話を皆さんからお伺いできて、びっくりするような、本当にそうだったのかなんて思いました。やっぱり日野駅の周りにたくさん会社の、石炭を取りに来たり、何ていうのかな、そういう貨物の基地みたいな形で日野駅があったということも、私たちも初めて知りましたし、そういう意味で日野駅というのは貴重な駅だったんだなと改めて感じることができました。本当にありがとうございました。

これから先も、今年１年、120 周年なので、日野駅に関しての情報を、こういうこともあった、ああいうこともあったって、図書館で集めております。ぜひこういうのを一つ、小さな冊子にでもして残していきたいと思っておりますので、皆様からの情報をいつでもお待ちしておりますので。本日はどうもありがとうございました。

（　終了　）

□当会終了後のやりとりから

井上：お願いがあるのですがいいですか。駅舎の中に小さなベンチがというか、椅子がというか、くくり付けの、あったんですよ。

山崎：ああ、今のあれのところ。

谷享司：キャッシュコーナーのところに。

井上：キャッシュコーナーのところに、昔の腰掛みたいのがあって。

谷享司：木の。

井上：その上に東光寺と坂下地蔵の写真が貼ってあったんですけれども、その中の写真をどなたか持っていないですか。その腰掛があったときの。

山崎：ああ、その。

木村：キオスクの裏だな。

井上：あそこに二人掛けぐらいの小さな腰掛があって。

山崎：あったあった。

不明：幅の狭いね。

山崎：私が高校の時ぐらいまであった。かつてその、原宿駅だったっていう話を書いてあったけど。

不明：そうですね、これ。

不明：昔原宿駅っていうのは嘘だった。

山崎：ええ、嘘って最近わかったけれど、そこら辺に書いてあった気がする、日野駅に、

あとの方に。

不明：書いてあったようですね。

山崎：その、書いてあったやつ。で、いつの頃からか外されていたんです。

石嶋：おかしいって指摘されたの。

山崎：恐らくは。

井上：これはあれですよ、左側が駅ですよ。右側が平野さんの。

谷享司：あれ平野不動産。

荻原：甲州街道のガード下が、四ツ谷側の。

石嶋：昭和５(1930)年だっていいますよね。

河野：昭和５年、あの建物はそんな頃からあったの？

石嶋：はい、ありがとうございました。